

# 研究所だより

第456号  
2023年 4月10日  
発行：土佐清水市教育研究所  
TEL 82-3015

“春の小川は さらさら行くよ 岸のすみれや れんげの花に  
すがたやさしく 色うつくしく 咲けよ咲けよと ささやきながら”  
『春の小川』 日本の童謡・唱歌 1912年（大正元年）



～春爛漫 2023（令和5）年度スタート～

風雨に舞う桜の花びらが、空を、地面を、水面を桜色に染めるなか、各校では2023（令和5）年度の始業式、入学式が執り行われたことと思います。久しぶりに子どもたちが登校してきた学校には、元気で、明るい声が響き渡っていることでしょう。

学校現場では、コロナ禍の影響で全国的に不登校の児童生徒の増加や生活リズムの乱れ、運動不足などが統計にも表れています。5月8日には季節性インフルエンザと同等の「5類」に移行し、制限が緩和され、人々の生活は平時に戻ります。子どもたちがマスク無しで笑顔一杯に過ごせる環境に早く戻ってほしいと思います。

学校（学級）は、子どもたちにとって集団生活の基盤です。自分と心の通い合う仲間がいる。その事が学校生活を充実したものにします。一人ひとりがかけがえのない存在として尊重され、安心して生活する権利を持っていることに気づかせ、心の通い合う温かい人間関係を育てていくことが大切です。

そうした面で教師は、児童生徒の集団を教育していく宿命にあります。集団を活用できる素晴らしい仕事をしています。その集団づくりが教師の仕事の中心であり、集団づくりができるかどうかの仕事の成否も左右します。良い集団づくりをして、個々の児童生徒を良くして、更に集団が良くなって、個々の児童生徒が更に良くなる良好な環境をつくり出すことが大切です。

学校生活で、子どもたちが一番長く過ごすのが授業の時間です。この時間が満たされていること（わかり、できて、使えて、学び合える）が子どもたちの喜びとなります。教師の授業力向上とより良い集団づくりは車の両輪です。両輪がうまくかみ合えば互いに相乗効果を発揮していきます。子どもと共により良い集団づくり、授業づくりに取り組んでいきましょう。



『喜んで登校 満足して下校』



## 《新しい職員の紹介》

この度の人事異動で教育センター・家庭児童相談室に新しい職員が着任しましたのでご紹介します。

〇片岡 里佳子さん

4月1日付で教育センターに着任しました片岡里佳子です。  
どうぞよろしくお願ひします。

## 《教育センターの紹介》

教育センターでは、少年補導センター、教育研究所、適応指導教室、家庭児童相談室の4部署とスクールソーシャルワーカー、ヤングケアラーコーディネーター、アウトリーチ型カウンセラーが連携しながら、児童・生徒を取り巻く教育環境の整備、教職員・保護者等の教育相談体制を確立し、様々な教育分野に対応し、可能な協力と支援をさせていただきます。

（教育センター組織図）

\*センター：82-3015

所長：田村 五鈴
主管全般
所長補佐：永野 博文
主管全般補佐、庶務、予算等

少年補導センター 82-3501	教育研究所 82-3015	適応指導教室 82-3016	家庭児童相談室 82-0355	SSW 注1 82-3016	YCC 注2 82-0355
奥谷 博史 (補導教員)	勝間 康人 (主任研究員) 谷岡 大洋 (研究員)	泥谷 人美 (児童生徒相談員)	岡部 千代 片岡 里佳子 (児童家庭相談員) 田村 雅宏 (児童虐待防止対策 コーディネーター)	浜岡 篤 文野 貴之	中野 史也
補導活動 相談活動 環境浄化活動 広報活動 研修活動	教育内容・方法の 調査研究 教職員研修の助成 教育研究会運営 教育活動の支援 あすなろネットワークの 運営	不登校児童生徒 支援 教育相談 適応指導教室 (あすなろ教室) の運営	児童家庭相談全般 (要保護児童対策地域 協議会調整機関) 児童虐待防止対策	教育相談全般	ヤングケアラー への相談支援等

\*アウトリーチ型スクールカウンセラー（ORSC）：こまつ ひろのぶ小松 宏暢さん

週2回（火曜日・水曜日）：訪問相談・支援等を行います。

教育センターでの来所相談をはじめ、訪問支援、学校訪問等を通して、各学校や家庭と連携を図り、幅広い支援へと繋げていきます。

\*注1：SSW（スクールソーシャルワーカー）

いじめ、不登校、暴力行為、児童虐待など児童生徒の置かれているさまざまな環境に働きかけて子どもの状態を改善するため、学校と関係機関を繋げていきます。

\*注2：YCC（ヤングケアラーコーディネーター）

ヤングケアラーへの相談支援に関する業務を行います。

「ヤングケアラーはこんな子どもたちです」  
家族にケアを要する人がいる場合に、大人が担うようなケア責任を引き受け、家事や家族の世話、介護、感情面のサポートなどを行っている18歳未満の子どもをいいます。

## ～望ましい学級経営～

新年度がスタートしました。担任教師の下、集団生活が始まって行きます。子どもたちは、学校・学級の生活に慣れ、学校生活での自立への道を歩み始めます。しかし、集団生活であり、学級の人数分の個性が集まっていることから、互いにぶつかり合い、多様な課題が生じたり、あつれきが起ったりします。それらを担任教師の指導の下で解決し自己実現が図られることで、学級生活への自信が高まり、さらに、いじめのない、互いの良さを認め合えるような学級集団の人間関係が深まっていきます。安心感、充実感、満足感などを実感して、さらに目標実現、課題解決に向けて自発的・主体的で行動的な子どもたちに育っていきます。子どもにも教員にも良い思い出がいっぱいの充実した一年にしたいものです。いじめについてはそれが起こらない、たとえ起こっても、その解決へのプロセスが成長につながる学級でありたい。

学級がまとまり、子どもたちが個として、集団として目標に向けて自己実現が図られるよう教師が教育・指導していくことが望ましい学級経営です。

まずは、

### ①子ども理解

家庭環境も含め、子どもの性格や資質・能力、学校生活への思いや願い、友だち関係、教師との関係など、一人ひとりの子どもの理解に努めることです。子どもたちを理解しようとする構えと努力があることで、教師との人間関係が出発し、個々の指導や集団の指導が可能となります。

- どの子にも挨拶や声かけをします。挨拶はコミュニケーションの出発点です。教師の方から明るく元気な声で積極的に挨拶の声を送るようにします。
- 子どもの話や声をよく聞き、聴くようにします。子どもの話や声に聞き耳を立てたり、直接話をよく聴いたりしてその内容から子どもたちの思いや願いなどを読み取るようにします。
- 子どもとのコミュニケーションの機会や場を積極的につくることです。意識して場や機会をつくるようにすることです。
- 授業中でのコミュニケーションを大切にします。授業の時間が子どもと一緒にいる時間が最も長いのです。その過程で子どもと触れ合うことを大切にします。どの子も学習が楽しく分かりたいと願っています。それに応えるように子どもと関わることを大切にします。
- どんな行動についても、注意する前に「何があったのか、どうしたのか」を問います。まずは、事実の確認を優しい口調で聞くことです。
- 個々に個性があることを大切にすることです。子ども一人ひとりが考えも行動も違うこと、何を望み、何を求め、どう行動しようとしているのかを理解しようすることです。
- 子どもたちは常に変容している、成長している存在であることを認識しておくことです。その認識を持って観察していれば、小さな変化や変容を見逃さずに認め、見いだすことが出来るようになります。

### ②目標の実現

子どもたちが学級生活を主体的・創造的に展開するためには、自分たちの学級の目標を立て、その実現に力を合わせる体験や、自分たちの生活に起因する様々な問題を話し合いで解決し、より良い生活を実現する体験などを味合わせる事が大切です。



- 子どもたち一人ひとりが学級や教師に対してどのような思いや願いを持っているかを把握することに努めます。
- 個々や学級のスローガンを大きく掲示し、常に見えるようにしておきます。それらは、自分たちの行動や活動を見直し、振り返る際の評価基準や物差しとなり、それらを意識させて、良さを課題を明らかにし、次に繋げるように指導することです。
- 活動の過程で折々に評価し、目標の実現状況やそこまでの努力や工夫を評価していくことです。
- 結果やゴールに際しては、実現状況を共に認め、喜ぶことを第一にし、改善点があれば今後に繋げ生かすように励ましていきます。

### ③問題の解決

学級は集団生活ですから、一人ひとりの問題、集団としての問題など、様々な問題が生じます。その解決に向け、教師として、人生の先輩として指導・助言することが求められます。

- 問題状況や実態をきちんと把握することに努めます。時に背景や要因が複雑なこともあり得るし、プライベートの問題もあります。それだけに慎重に対応しなければいけません。
- 解決策は可能な限り子どもたちから出させ、いくつかの案を列挙し、話し合わせます。その判断の基準は学級目標であり、それを大切にしながら十分に話し合わせます。



## 家庭訪問で子どもの姿をつかむ ～最初の出会いを大切に～

家庭訪問は、「家庭での子どもの様子や保護者の教育要求を聞いて今後の教育に役立てるために行う。」という点をしっかりおさえておく必要があります。

最初の出会いですから、まずは保護者の話を聞く（傾聴）ことです。話を受け止めることから良好な関係（パートナー）ができてきます。話の中で「それは…」 「けれど…」と疑問を呈したり、否定的な言葉が出ると話は進みません。保護者の悩みに耳を傾け、共感的理解者になることから、共同の歩みが始まります。その点を配慮しながら家庭訪問に臨んではいかがでしょうか。

具体的におさえるポイントとして

### ○子どもの育っている教育環境から子どもの姿をつかむ

- 災害、防災等の緊急時に対応するために、子どもの家の所在地を確認する。
- 子どもの生活環境を知る。（地域の特性、通学路や危険箇所、家庭学習、遊び場、家事分担など）
- 保護者の子どもについての考えなどを率直に聞く。（育児観、教育観）
- 家庭における子どもの長所、短所を知る。（親の子ども観など）
- 保護者と教師の情報交換、相互理解を図る。（子どもの病気、怪我、進路、友だち関係など、学校では話せないことなども話し合う場になる。）
- 保護者と子、教師の信頼関係を築く。
- 保護者からの学校や担任への期待や要望を聞き、収集する。

